

句集

# 白地

柴崎富子

「白地」の前半は、対象を見る富子さんの厳しい眼が的確に表現されている。

後半、自身の病により入院の止むなきに到る。対象は「夫」を主体とするようになるが、その夫婦愛に些かの緩みもない。自らの身は病むも、その心は純粹に俳句の道を進む。その厳しい温かい句心が、読む人の賛同を得る句集である。

春燈主辛 安立公彦

機町に灯の入る山茶花時雨かな

痩せこけし魚板の腹や初霰

蕪村忌の句座の灯へ寄る狐かな

母の忌の荃石川にもどしけり

遠雪崩こけしは肩をすぼめけり

魃簀編む竹の直情なだめては

海鳴りへ挑む火の粉や磯焚火

古書市へ四温の足を伸ばしけり

流氷の胴ぶるひして動き出す

春筍の土匂ひ立つ朝の糶

花  
筏  
瀬  
を  
曲  
る  
気  
を  
揃  
へ  
け  
り

聞  
覚  
の  
声  
が  
後  
ろ  
に  
花  
月  
夜

花  
時  
計  
の  
針  
磨  
き  
を  
り  
卒  
業  
子

目  
の  
開  
き  
し  
子  
猫  
に  
東  
京  
タ  
ワ  
ー  
の  
灯

鯉  
幟  
天  
与  
の  
風  
を  
捉  
へ  
け  
り

剪  
ら  
な  
い  
で  
剪  
つ  
て  
と  
薔  
薇  
に  
見  
詰  
め  
ら  
る

陶  
枕  
の  
山  
水  
夢  
に  
通  
ひ  
け  
り

熊  
蟬  
の  
万  
の  
声  
明  
広  
島  
忌

一輪挿の木犀の香や試着室

銀座越後屋真砂女好みの秋裕

詩魂告ぐ真砂女形見の秋裕

鳥羽僧正忌朝鴉のこゑととのひぬ

泳ぎ出す気配の魚拓稲光

イヤホーンの音もれてをり鹿火屋守

伊吹山隠す緋かぶら高干しに

日の逃げし鯖街道や芋水車



関跡守る鷹の八方睨みかな

象踏みしてふ若狭路や雪時雨

段畑を弾む海鳴り寒土用

屋根石の芯まで凍つる荒岬

朧夜や木の香に沈む木地師村

墨堤の花に逢ふ髪染めてけり

恋猫を眠らせてをり休み窯

駅弁の落味噌の香や啄木忌

六義園大江戸振りの緑立つ

花莫塵一枚母と子の小宇宙

スペイン  
五句

熱風やトレドを守る野面積

向日葵の丘波打つて果てしなし

ローマ橋のアーチの数や出水川

「花の小径」抜くる日傘をかしげ合ひ

夕弥撒に参ずる汗をしたたたかに

山の影いくつかぞへて鮎落つる

綾線の日ごとに近し畑仕舞

万卷の書読めず秋重ねても重ねても

紅葉且つ散りて素案のまとまらず

真砂女亡きことをいまさら酉の市

冬至 柚子置く夕映の厨窓

そむき合ふ水仙一氣に束ねけり

山影のかぶさる早さ懸大根

雛飾るかくすすべなき手の齡

著者略歴

柴崎 富子（しばさき・とみこ）

昭和6年7月 東京・巣鴨に生れる  
昭和29年3月 津田塾大学英文科卒業  
昭和45年11月 「春燈」入会  
昭和57年度 春燈賞受賞  
昭和62年 燈下集入集  
平成元年7月 第一句集『山日和』上梓  
平成18年9月 第二句集『ピカソのハンカチ』上梓  
俳人協会会員

春燈叢書第189輯

句集 <sup>しんと</sup>白地

2019年7月13日 発行

定 価：本体2800円（税別）

著 者 柴崎 富子

発行者 奥田 洋子

発行所 <sup>ほんあき</sup>本阿弥書店

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 〒101-0064

電話 03(3294)7068(代) 振替 00100-5-164430

印刷・製本 三和印刷

ISBN 978-4-7768-1439-9 C0092 (3155) Printed in Japan

©Shibasaki Tomiko 2019